

## [ 講演要旨 ] 個人の被災体験を教訓化し防災教育教材にする試み

～ 1944 年東南海地震・1945 年三河地震を事例として

木村 玲欧・林 能成 (名古屋大学大学院環境学研究科)

### 1. 地域の災害教訓伝承の必要性と、現在の防災教育の問題点

災害は、地域の地理的・社会的環境によって様相が大きく変化する。同じ地震動でも、地域によって被害様相は大きく変わる一方で、外力の種類や規模が違っていても、ある場所ではその脆弱性の特徴から同じような被害が繰り返し発生することも考えられる。それゆえ、地域における過去の災害履歴を学び、知見・教訓を次世代へ引き継ぐことは、長期的視点にたった防災教育には欠かせない要素である。

しかし、現在行われている防災教育では、「最大震度 7、死者 2000 人」といった総論的な数値にまとめられた災害像や、災害時のマスコミ報道に見られる「命を落とした人々」「かわいそうな被災者」といったステレオタイプな犠牲者・被災者像が示されることが多く、「長期的な災害過程の中で被災者がどのような課題解決場面に直面し、どのように日常生活を建てなおしていくのか」という、「長期的な災害を乗り越えていく力」を養うような防災教育はあまり行われていない。

### 2. 体験談による豊かな災害イメージの醸成をもとにした防災マインドの育成

そこで発表者らは、「土地の古老の三河地震被災体験談から学ぶ、地震・災害のしくみと防災のあり方」というプロジェクトを立ち上げ、地元自治体の防災課や教育委員会との協働のもと、「被災者の生の体験談に直接しその迫力を知り、豊かな災害イメージを醸成させる」とことと「専門家の指導のもとに生の体験談から防災教訓を抽出して、実際の防災行動が芽生えるような防災教育を行う」ことの両方を視野に入れた防災教材の作成、防災教育活動の実践を行っている。

安城市立志貴小学校を例にとると、6 年生を対象にした 2 時間(90 分)連続授業を実施した。地震の基礎知識(20 分)の後、同市和泉町で三河地震に遭遇した被災者(鈴木敏枝さん・沓名美代さん)から、当時の心理・行動について具体的に紹介された(25 分)。その後、体験談から「いのちをまもる」ためにどうすればよいのかを、ドリル形式の教材で復習(45 分)していった。この試みについて、事前・事後にとったアンケートなどから「生の声を聞くことで、具体的な被害のようすやすべきことを身をもって知ることができた」という評価を得ることができた。

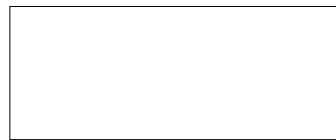
今後は、さまざまな小学校で実践を繰り返しながら「体験談をもとに、防災を科学的・体系的に学ぶカリキュラムの標準化」をめざしていきたい。

#### 1 体験者のお話を復習しましょう。



沓名美代さん・鈴木敏枝さんは、地震でどんな体験をしたのでしょうか。絵をヒントに、思い出してください。

- 1) 神社にいたときに地震が起きました。その時に、男の子がとても危険なことをして先生に怒られました。男の子はどんな危険なことをして怒られたのでしょうか。



- 2) 夜の地震で、ふだん住んでいた家は全壊したのに、家族は誰も亡くなったりケガをしませんでした。なぜ、みんな無事だったのでしょうか。



上：体験談をもとに作成されたドリル(一部)  
下：ドリルを解く安城市志貴小学校の 6 年生